

PISA 型読解力

日本教育大学院大学 北川達夫



私は、OECD（経済協力開発機構）が2009年に実施したPISA（学習到達度調査）において、読解力調査の専門委員として問題の作成と評価に携わった。言語も文化も異なる、約70ヶ国の生徒の読解力を、同一の問題で測定することは可能なのだろうか？当初は半信半疑だった。だが、各国の委員と議論を重ねつつ問題を作成するうちに、疑問は氷解していった。本文を、まずは文字通り正確に読む。文脈にそって、明確には書かれていない背景を推論する——読解の基本は、世界中どこでも同じだからだ。ただ、そこに「異質性」という要素を、常に意識できるかどうか、グローバルな世界を背景としたPISA読解力調査の特色だった。

ここで、中学時代の英語の授業を思い出す。サイドリーダーの物語文を読むのだが、30年以上前のことだから、生徒が一文ずつ順繰りに和訳する古典的なスタイルだった。迫り来る殺し屋に対して、主人公が命ごいをしている場面である。

生徒A『『お前を殺してやるぞ』と、殺し屋が言いました』

生徒B『『どうぞ!』』

ここで教室は笑いに包まれた。「殺してやるぞ」と言われて、「どうぞ」と命ごいする人間など、いるはずもないからだ。生徒Bは「Please!」という主人公の言葉を、文脈を考慮することなく和訳してしまったのである。「どうか、助けてください」とでも意識すればよかっただろうに……。

ただ、当時、想像力だけは豊かだった私は、「殺してやるぞ」と言われて、「どうぞ」と答えるような状況も、世の中にはありうるだろうな、などと勝手に想像していた。たとえば、自分が進んで犠

牲になることで、誰かを助けようとしているような状況、あるいは殺し屋に対して、主人公が何らかの負い目を感じているような状況——などなど。もちろん、この物語の文脈では、当然の推論として、そのようなことはありえないのだが。

やや極端な事例ではあるが、PISAの読解力では、こういった視点が必要である。同じ語句でも、文脈が異なれば正反対の意味になりうる。文脈にそって解釈（推論）するといっても、そこには自分の信念や価値観、知識や経験が大きく影響していること。だから、自分と他者の解釈が異なる時、「他者はなぜそう考えたのか」と考えると同時に、「自分はなぜそう考えたのか」と考えなければならない。先述の事例にしても、「どうぞ」という和訳を間違いとして排除することよりも、なぜそのような解釈に至ったのかを考えることのほうが重要なのである。あらゆる「違い」（事実誤認によるものさえ含めて）を「異質性」として受け止め、俯瞰的にとらえることこそ、PISA読解力調査の求める、中核的な能力といえるだろう。

OECDは、グローバルな世界を生き抜くためには、異質な社会集団（heterogeneous group）と共存し、さらには協働する能力が肝要であるとしている。そのためにはまず、あらゆる異質性を受け止め（ただし、受け入れる必要はない）、俯瞰して考える能力が必要である。そして、異質性を踏まえて、自分のとるべき言動を判断する能力が必要なのである。

こういった能力を測定するのが、OECDのPISA読解力調査である。そして、こういった能力を育成するのが、これからの英語科教育であるべきではないだろうか。